

第21回小野十三郎賞受賞者インタビュー
結婚も出産も育児も
「女性という生き方」
の一部である

語り手・犬飼愛生
聞き手・高田文月

●小野賞の反響

高田 小野十三郎賞、ご受賞おめでとうございます。

犬飼 ありがとうございます。

高田 最初に、小野賞を受賞されて感想を、一言お願いします。

犬飼 小野賞をいただきまして、反響がすごく大きくて、新聞社から取材していただいたりとか、作品を書いてほしいって言っていたりとか、注目度が高い賞だなんてすごく感謝して、またこれからもがんばっていききたいとおもっています。

高田 最近では朝日新聞の夕刊に大きく掲載されました。それ以外にはどんなメディアから取材が来たんですか？

犬飼 自分からお願いしたところも大きいんですけど、京都新聞とか、自分が住んで

ます中部地方の中日新聞、あと中日新聞の母体である東京新聞のほうには作品も載せていただいています。

高田 もう東京新聞のほうの掲載は終わりましたか。また機会があったら拝見したいです。

犬飼 それと青土社さんの「ユリイカ」に執筆依頼をいただきまして、十一月の末に発行されます。

高田 着々と来ていますね（笑）。

犬飼 とても注目していただいています。

高田 京都新聞はご出身が京都府ということだったので。

犬飼 それで、以前京都新聞にエッセイの連載をさせていただいたことがあるので、古いご縁なんですけど、またそのときのご縁をたどってお願ひしいにきましたら、取材していただけました。

ということになりますよね。

高田 今回受賞された『stock mark（ストックマーク）』という詩集で、中のしおりの山田兼士さんの文を読みましたら『胸の隙間にリンゴジャムパン』という作品を卒業制作で出されて、それが優秀作品賞として受賞されてるんですね。その作品を入れると、『カンパニユラ』と『なにがそん

なに悲しいの』に続いて四冊目の詩集ですね。

犬飼 『胸の隙間にリンゴジャムパン』は、普通の大学だったら卒業論ということになりますけど、芸大なので卒業制作になります。その時期に詩集をつくって、それはもう一冊しかないんです（笑）。

高田 ええっ、そうなんですか！

犬飼 いまだつたらしいろんな安い方法で印刷できるとおもってますけど、二十年以上前から、当時は東急ハンズで製本セットっていうのを買って。

高田 ええ、じゃあ手作りです。

犬飼 そうです。たつた一冊しかないのが学校預かりになってますので（笑）。

高田 賞を貰いはったからですね。そうでなかつたら普通の人は返してもらえないんですよ。手元にないの？

犬飼 返してほしい（笑）。

高田 ほしいね、それは。ぜひ言って、山田さんからね。

犬飼 そうなんです。今回のことで、ちょっと自分も読み返したくて。

高田 もう一回写真でも撮って製版しなおしたらできますよね。それはもったいない。なにが手控えはあるんですか。

犬飼 実家の方に資料はあるとおもうんですけど、ちょっと今回を機に言ってみようかなと。

高田 それはいいですね。で、今回の受賞された詩集を読ませていただいてたら、へ胸の隙間にリンゴジャムパン〜などというフレーズも詩の中に出てきて、もうその頃の私じゃないのよ的な、それを思い出すようなフレーズもあって。その詩集のあることを知っていると、楽しく読めるな、とおもいました。もうひとつ、経歴を読ませていただいたら、とにかく詩を書き出したのが中学生のときの新聞の投稿だということでした。中学生新聞というのがあるんですか？

犬飼 はい。いまは残念ながら休刊されるんですけど、毎日新聞に。いまも小学生新聞があります。で、中学生新聞もあつたんです。そこに詩のコナーがあつて、それが一人だけじゃなくて十人ぐらいでぱつと載れるような大きな紙面だったので、もしかしら載るんじゃないかという期待があつて出してみたんです。

高田 中学生新聞はいまなくなつての？ 本家の新聞でも発行部数が減つてるぐらいやからねえ。

犬飼 やつぱり中学生つてなると、なかなか。

高田 そういうコナーがあつて投稿していたという事は、中学生新聞を購読してたつてことね。

犬飼 はい。小学生新聞から家であつたので、その流れですつと中学生になつたら中学生新聞つていうことに。

高田 新聞を読むこともやつたつていうことがまず前提としてありますよね。読んで関心を持つつていうような子ども。

犬飼 いまみたいにインターネットもゲームもそんなにないですし、どこのご家庭も新聞つてとつてた時代だったので、こどもはこども新聞つていう考え方で。

高田 家庭の方針がやつぱり教育的やつたかな。私はまったく犬飼さんと同世代のこどもがいるんです、実は。同年生まれ。男ですけれどね。だから、その時代はわかりますよ。私はそういう親じゃなかったです。

(笑)

犬飼 そうですか。親は新聞も好きな人でした。

高田 誰に言われるでもなく自分で投稿した？

犬飼 そうなんです。ほんとの投稿は小学

生新聞のときで、四年生のときだったとおもうんですけど、読者参加コナーとかありますよね。そこへ出してみたら載つたんですね。

高田 それが大きなきっかけですね。

犬飼 そうですよ。だつて自分がはがきかなんか送つて載るなんてすごくないですか。

高田 なんの邪心もなくぽつと出すわけしよ、こどもやから。ものすごい励ましですよ。

犬飼 そうなんです。ものすごく嬉しくて、「わー、載つたー」ておもつてね。

高田 ぜつたい嬉しいとおもう。そのきっかけにずつと背中を押されて、四十歳になるまで詩作がつづいたつていうのがすごいです。その初動のひと押しが大きい。

犬飼 投稿するつていうことが好きだったとおもいます。

高田 そういうような話、どんな女の子やつたんかな、みたいなのをね、自分が母親世代やし、興味があつて聞いてみたいなどおもつていました。活字が好きで、本が好きで。そのときね、たとえば小学校とか中学校のときに、投稿があるじゃないですか。

自分以外のこどもたちがいろいろ書いてる

でしょ。もちろんその詩も読んでたわけでしょう。

犬飼 もちろんです。

高田 いいなあとおもったりして、ちょっとときめいたりとか、共感したりとか。

犬飼 ありました。やっぱり毎週月曜日にそのコーナーがあったので、あ、この人また載ってる、また載ってるっていうのがあって、常連っていうのがありますよね。

高田 あこがれますよね。名前だけしか分からんのかな。

犬飼 で、私も載りたいなっておもったり。この人の詩が今日も載ってて、読みたかった！とかね。もうファンですよ。

高田 わかります。投稿仲間ですね。

犬飼 でもその人たちの連絡先とかはわからない。

高田 その頃の方が、名前変わってたらわからないけど、ずっとどこかでまた書いてとか、ありません？

犬飼 ずっと調べたいとおもってるんですよ。自分より優れた書き手っていうのはたくさんいましたから、この人はどうしたんだって。

高田 気になるよね。

犬飼 会ってみたいなっていうふう。

高田 思うよね。そんな部分も話で聞いてみたかって、でも実際には会ってない。

●中学生新聞投稿欄の担当記者に会いに行く

犬飼 会ってないんです。その詩のコーナーの担当の新聞記者の方がすごい変わった方ですね、ふつうだったら批評的なコメントをしたりするとおもうんですけどそうではなくて、この中学生に、私だったら読んでほしい本とかね、最近みた映画の話とか、関係ないコメントを載せてくるんです。

高田 いいですね、それ。もつとこの子を伸ばしてやろうとか、この子にはこれがいいとかね。

犬飼 かもしれないです。その方にあこがれてね、こつちもずっと投稿させてもらって、高校生になったときに新聞社に連絡して会いに行つたんです。

高田 ええー、会いに行つたんですか。すごい行動的だね。

犬飼 東京まで。東京の本社でした。

高田 その行動力というか、自分が素直に求めていることをアクションするっていうその素直さも素晴らしいですね。

犬飼 そうですかね。興味がふつう以上に

強かつたんですかね。

高田 その方に会えました？

犬飼 会えました。編集部もずっと案内してもらってたね。

高田 向こうの記者さん、喜んだでしょうね。

犬飼 わからないですけど、京都から深夜バスに乗って行きましたね。

高田 やっぱりたくましかつたんやね。

犬飼 いま客観的にみればそうですね。

十五、六歳の少女が、一人で(笑)。

高田 じゃあそのお方のお名前とか、言わなくてもいいけども、きちつと……。

犬飼 覚えていて、大学に入る前にも一度編集部で電話したらもう辞められてて会えなかつたんです。退職されてね、わからなくて。女性の若い記者さんだったんです。長いこと途絶えてたんですけど、今回こうやって小野賞をとらせていただいたら、やっぱりきっかけを皆さんインタビューで聞いてくださって、毎日中学生新聞の話をしてね、会いたいなおもっていたら、最近writerで毎日新聞のひとが気がついてくれまして、探してるっていう私に。大阪本社の学芸部長さんが気づいてくれて、いま探してもらってるんですよ。

高田 いまは探してる最中。その当時の女性担当者をね。

犬飼 そうなんです。だからそこで会えたら、ちよつと物語ですよ。十三歳の少女がずつと書き続けて、大学で詩を勉強してようやくこうやって賞をいただいたっていう物語(笑)。

高田 そのきっかけをつくってくれた方が、若い女性記者だったということもいいですね。同志のような気がちよつとしますよね、先輩として。そしてその女性記者は影響力があつたわけですから。

犬飼 そうなんです。

高田 その投稿欄には選者とかはなかったんですか。小野十三郎は産経新聞の詩の選者やつたとかね、あるでしょう。その先生の名前はなかったんですか。

犬飼 はい、全然ないです。

高田 じゃあ、新聞記者さんが選んでたんですよね。有名な誰々とかいう名前じゃなくて。女性記者の方がやっぱ詩とかに関心が高い方やつたんですよね。素晴らしい話やね。そういうことってなかなか聞けないからね、聞いてよかつたなあ。じゃあそれからずつと、高校の時も書きつづけましたか？

犬飼 はい、書いてました。

高田 高校の時はどこに投稿してたんですか？

犬飼 いや、高校の時はもう投稿先を見つけることができずに。

高田 大人と子どもの端境ですからね。

犬飼 わからずに、一人で家で書いてただけ。

高田 書きためていたんですね。

●大阪芸大で詩を満喫する

犬飼 どうしたらいいかわからなかったときに、大阪芸大で詩のゼミがあるっていうことが受験で学校を探するときにわかって、ここにいくしかない(笑)。

高田 私の道はこしかないうつていうか、とりあえずいまは詩を書くんやと。

犬飼 ふつうの大学生みたいな一般大学も探してたんですけど、やっぱりなんか違うな、つておもつて、芸大で詩のゼミがあるつてわかつたときに、もうそれが高校三年生の十二月になつてしまつて(笑)。

高田 そうなの。進路がそこで決まつたん。

犬飼 もうそれまでは関西のふつうの大学を目指してたんですけど、なんか違うなあとおもいながら。で十二月にね。

高田 推薦入学とかもね。

犬飼 もう終わつてまして、オープンキャンパスみたいのも終わつて、お母さんと二人でなんでもない日に学校を見させてもらつて(笑)。

高田 一般入試で受けたん？

犬飼 一般入試で受けました(笑)。ギリギリなんですけど。

高田 気いつくのがもつと遅かつたら終わつてるやんね。でもそこで自分のおもいを叶えられて、また大学では一生懸命。

犬飼 楽しかったですね。そこでようやく自分以外の詩を書く仲間を見つけたんです。高田 それまでは自分だけがひとり書いて、一方的に投稿して、評価されるという、仲間はな形。

犬飼 いまみたいにインターネットもないですから、仲間も探せず。

高田 孤独やね。

犬飼 そうなんです。孤独だったのが大学に入り、こんなにいっぱい詩を書いている仲間がいるつておもつて。

高田 特に芸大やからね。

犬飼 だから詩だけじゃなくて、小説とかも書いてる友達もいっぱいいたんで、面白い大学やな、とおもつてね。

高田 わくわくするね。求めている方向で

受け止められている感じやもんな。

犬飼 すごい楽しい四年間でした。

高田 すばらしいね。目的意識があつて提供してくれる知識と情報と、ぜんぶ自分の求めているものやったというわけやね。

犬飼 そこで山田兼士先生と出会つて、ゼミにすぐ入つて。

高田 文学学校のチューターしてはつたんですね。

犬飼 されてたとおもいます。

高田 第一回の小野賞のときか前後ぐらいに入学してはるからね。それは間違いないですね。経歴も読ませてもらつたら、どこかで響きあつて。楽しいな、とおもつて犬飼 そうなんです。小野賞ができたのが九十九年ですから、私が大学に入ったのが九十七年ですから、ちょうどゼミが始まつた頃ですね。三回生といええ。そのときへ入つておもつて。

高田 アンテナが働きますよね。小野賞があるんや、とかね。

犬飼 しかもそんな大阪のゆかりのある賞で、とおもつて、わつとおもいましたね。

第一回は瀧さんだったかな。

高田 よく覚えてはりますね。瀧克則さんです。

犬飼 山田先生がなんかの折にご紹介されたとおもいます。

高田 そうですか。ゼミかなんかだね。

犬飼 そのときにね、瀧さんは会社員かなんかされて。

高田 測量士。

犬飼 測量士で会社を経営されてたのかな。

高田 そうです、そうです。

犬飼 詩を書いているつても従業員の方になつたて言つてなかつたつていう話でした。

高田 そうそう。賞を受けて、はじめて。それまでは全然まわりの仕事関係の人には知られてなかつたそうやね。

犬飼 その話を印象的に覚えています。

高田 詩は特別なものというか自分の生きる中でも当然詩を書くという行為があつた感じやね、そしたら。思春期のはじめのはじめに自分はなにかつていう芽がひらくときに詩を書くという自分の媒体を見つけてるんやから。そのことで大きくなつてるつて感じですよ。大きくなつて言つたら失礼やけど。

犬飼 自分としてはまずずっとやつてきたことで今回の賞をただけて、自分としてはもう三十年ぐらい書いてるつもりです

(笑)。

高田 もちろんですね。

犬飼 ずっと書いてたものがこうやつて実を結んだつて感じて、ほんとにすごく嬉しく感じています。

●看護師という職業を選ぶ

高田 それまでの作品をずっと読ませてもらつたら、いろんな仕事もされつつも詩を書いてたりするけど、今度は看護師という仕事を自分で、すごい決意で選択されてると私から見たらおもうんですが。いままでまったくそういう方向になかつた。すごいジャンピングボードで違う人生を選んだわけですよ。いままでずっと学生や子どもやつたときから詩を書いてたのと、またお勤めもされてたやろうけども、自分の主たる関心は詩を書くことだったつていうような環境と全くちがう、子どもを生んで、看護師になるつていう人生の岐路を経て書き続けてきた。その後にまた詩集をつくるということは、いままでとはずいぶん違うんじゃないかなあと私はおもうんですけど、大きな覚悟的なもん？ かなにかありましたか？

犬飼 看護師になつた理由はほんとうに大

した理由ではなくって、こどもが生後半年のときに大阪から名古屋に転勤になりましたので、私はそのとき仕事もやめたので、突然知らない土地に来て生後半年のこどもと二人っきりで孤独な中であつたんですね。

いろんな地域がやつてる子育てサークルみたいなんに行きましたら、初めてできた友達が見護師のお母さんだつたんです。その方はちゃんとした病院勤めだったから、育休を一年間とれますよね。そのママは一年間ずっと私と遊んでたんですけど、一年経つたら急に社会に復帰できますよね。はつとおもつてね、私このこどもと夫の転勤についていく人生ってなんかちよつと違うなつてまたおもつたんですね。前の仕事はもうマスコミ関係だったので、忙しくて、名古屋ではその分野っていうのは仕事も少ないですし、子育てしながらは難しいとおもつて、看護師っていいなあとおもつてね、看護学校へ行かないといけないんですけど(笑)。

高田 そうですよ。ゼロからですからね。犬飼 縁があつて、たまたま看護学校に入ることができたので。
高田 なかなかできることではないので、そこでもやつぱり行動力があるんかなつて

おもいますね。一人で記者さんに会いに行つたときとおなじようにふつと心に思つたことを、そこは次の一歩じゃなくてジャンプやおもつてね。それができる人やなつて。

犬飼 いまおもえば、おつぱいあげながら勉強してね。看護学校の受験に行つたときにまだ授乳してましてね、看護学校っていまは人気があるんですよ。社会人からも。そしたら面接待つのに二時間もかかつてね、

いっぱい受験生がいて。その間にお乳が張つてくるわけです。それをトイレで搾つてね。そんなことがありましたけど。

高田 自分の人生を自分で選び、そんな大層じゃないのかもしれないけども、私から見たらすごいことやとおもいます。どうしようかとおもつてじゃあ自分で自分の一歩をこう歩み出すわつていうときのその覚悟がふらふらしてなくて、自分の心の底に根ざしてるから、迷いがなんやね。

犬飼 思いこんだら一直線なのかな(笑)。

高田 そういう生き様みたいなのをやつぱり詩にあらわれてるから私は魅力があるとおもいます。昨日の選者の先生方のお話のなかで、坪内稔典さんが「いろいろ言葉があつて、生活があつてつてどなたかが言つ

たけども、生活だけじゃ面白くない。言葉に美がない」みたいにおつしやりましたよね。私でも、反論じゃないけれども、美だけではあかんことやつぱり考えました。

美よりやつぱり生活が、それがあつてその上で言葉の調子やリズムやと、適切な比喩をひき寄せる感覚・感性があるからですけど、それだけがあつてもぜつたい魅力はないと私はおもつので、いまだどうして生きていくかという目線。犬飼さんはそれがすごくいいねん。目指してる方向が。うつむいてるようやけど外も向いてるしね。それがこの作品を魅力的にしているんちがうかなとおもつて聞いてました。いちばん大事なのは書き手の人生に対する姿勢みたいな。犬飼 そうですよ。どういうふうに生きるかつてことですよ。だつてね、そうやって夫の人生に、転勤についていく人生って自分の人生でもあるけど、ちよつと人に引っぱられてしまう。否応なくそうしてる女性が多いかもしれないけど。

高田 なにも疑問を感じずにそれで満足してる女性もいるやろうけども、でも違うなつていう。
犬飼 自分の人生つてやつぱり、自分でデザインしていくほうがいいよねつておもつ

ていて、そのほうがぜったいに失敗はして
も人のせいにはできないですよ(笑)。

高田 そうおもいます。で、結婚されて、

赤ちゃんが生まれて、それから転勤なのね。
犬飼 そうなんです。

高田 赤ちゃんが生まれるまでは仕事もし
てた。

犬飼 そうですね。

●女性として生きるふっりの違和感と葛藤
高田 この受賞詩集を読ませていただいて、
過去の二冊とこれとで読みすすめていくと、
明らかに違うのは若い女性、若いといった
って三十歳前ぐらいになった時の作品です
が、その若さの違いね。ずっとその十年間
の作品があるのかもしれないけれども、以
前のはやっぱり若い女性のシングルの生活
ですね。当たり前やけれども。ここから十
一年でぜんぜん違う、厚みのある、「分厚
い」というような表現も、昨日の選者の座
談会でされましたけれども、やっぱりこ
っちの世界は分厚いんですよ。だけど私
はこれ、以前の詩集からずっとつづけて読
んだときにおもったのは、いまね、自分の
人生は自分で考えて選択して、人に頼って
生きてないっていう感じの女性だってい

うのをすごくわかったんだけれども、女の
人が生きていくっていうときに、やっぱり
結婚するまでにだれか特定の恋人ができた
り、そのときにパートナーとなって、対の
世界ができた、そしてこどもができるん
だけれども、そのときにもね、絶えず、
たとえばパートナーとの関係をなんの疑い
もなく過ごす幸せな状況っていうのを疑問
におもわずにずっと過ごせる女性もなかに
はあるけれども、そうじゃなくていつも他者
との関係のなかで自分はどこにいるんだろ
う、こんなにはまは幸せだけどこれでいい
のかな、ちょっと違うな、ひとりの世界は
どこだろう、みたいな問いかけがずっとあ
りますよね。そういう気分がね。女だから
といって、やっぱり求められる、世の中と
か男性から求められるようなファクターに
対する積極的ではないけども絶えず抵抗感
を抱いている。そういう印象を作品を読んで
受けていて、そのところで言葉が出てま
すよね、だいたい。

犬飼 そうですね。常に女性性を世間から
求められたりとかすることに対してはいっ
つも疑問を感じていて、私の世代とかだと
ちょっと女性ってね、けつきよくいまでも
そうですけど男尊女卑のところがあるんで

すよね。

高田 未だにありますよね。

犬飼 そのことを社会に出てもさらに感じ
るようになって、でも一方でふつうに女性
としての生き様とか、愛されたいみたい
なところもあって、だから完全なフェミニ
ズム主義でもないんですよ(笑)。

高田 わかります。それを小池さんがおっ
しゃってましたね。いわゆるフェミニズム
じゃなくって、それでも葛藤があつて屈折
していつてところがいいわっていう感想、
発言されるたびにそういうことをおっしゃ
ってますけれども、私もそれいちはんよくわ
かります。女性の読者やからね。ぜんぶび
つたりわかる。世代が違うけれども、ほんと
によくわかるというか、こういうことある
あるっていう。表現の仕方はぜんぜん違
うとおもう。リズム感もぜんぜんないから。
ほんとに(笑)。訴えたい気持ち、二つ目
の詩集「なながそんなに悲しいの」ってこ
れは、こどもが泣いている状況を見てるんだ
けど、それを自分に問いかけてるわけです
よね。周りの人が「こんなに幸せなのに何
をそんなに寂しがったり孤独だとおもった
りするの」と言うのよね。

犬飼 そうなんです。一見幸せそうに見え

るんですよ。ふつうの旦那さんと結婚してね、こどもも。

高田 文句ないやろ、と。

犬飼 なんの不満もないでしょって言うけど、でもほんととはそうじゃないですよね。だからときどき結婚して男性の姓になりたいたか、なれて嬉しいとかいう人に出会うと、すごくびっくりするんです。ええ!?とおもってね。

高田 昔の話ですが、結婚したばかりの友人を旧姓で呼んだら、「○○(夫の姓)と呼んで」と嬉々としていうんです。私には違和感があった。

犬飼 そうですか。ほんとに。

高田 まあ私たちの世代は年がもつと上、犬飼さんの親世代やけどもね、それでも私たちはもつと自由に男女平等の教育受けてると思ってる。夫の姓になることを喜ぶ友人にはショックでした。

犬飼 急に従属的な立場になるっていうのがすごく不思議で、私が二つ目の会社に入ったとき、結婚はしてたんですけど、そのときに旧姓のはんこで犬飼を使いますって言ったらすっごく抵抗されたんです。

高田 なんてやっつて言われたでしょう。

犬飼 「あなたは○○(旧姓)でしょ」っ

て言われて、えーっ、こんなこと言うのかとおもってね。

高田 マスコミ関係とおっしゃってましたね。

犬飼 そうなんです。マスコミでこれか、とちよつとびっくりしました。

高田 私も昔、ある百貨店に大学出てすぐ就職して、結婚して姓が変わったときき似た経験をしました。私の旧姓が変わった名前前で、愛着があつて、その名前使いたいと希望をいったけど、通らなかつた。大きい会社だし、古い体質で、まあ従いましたけど。そうした小さなストラグル、いちいちいや違う、いや違うって思う事を経験して私も生きてきたけども、じつさいにはほとんど流されてしまいますね。

犬飼 そうなんです。やっぱりこだわらずにっつていえば穏便に済むけれども、その根底つてやっぱり女性が下であるとか、こういうふうにするべきっていう世間の圧なんです。それは常に感じます。

高田 かといって男女別姓の結婚とか、意志的にそこまで押し通すほどのエネルギーもないというか、そのエネルギーは何か他にまわそうという感じね。

犬飼 もうちよつと柔軟であればいいです

よね。

高田 いまは通名でもいいよって役所が言い出してますけどね。

犬飼 最近ほんとにそういうので徐々に徐々に認められるようになってきてますけど、やっぱり一昔前つていうのは違いましたね。

高田 それだからつてフェミニストとしての詩を書いているつもりはないけれども、ふうに生きてるふつうの女の子が自分の気持ちをあらわせたらそこに引かからずにはおれないよつて感じですよ。それが気持ちよく出でて、私はわかるわあつと読んだりしました。

犬飼 嬉しいですね。

高田 「なんで悲しいの?」つていうのは確かに問われるとおもうんです。人間であるけど女であるのは間違いないですよ。女であるということ、男である性から何か役割をすでに求められちゃうみたいなね、それは違うやろう、という感じですね。だからその違和感をずつと言いつつ、今度はお母さんになったらお母さんの役割はどうなのよつて「ふつーのお母さん問題」にぶちあたつていくつていうのと、それと「夜のガーデン」で、夜になるとモラルが逆転

するとか、そういう微妙な世界で、けつきよく闇からみんな生まれてきてるじゃない？　っていう、それがいちばん冒頭に出てくるからね、すごい面白いなおもったんですよ。そういうことをみんな、素知らぬ顔をしてね、口ぬぐって、明るい昼間を生きているけど、ほんとはいろいろ矛盾もあって、子どもによう教えんけども教えなきゃいけないような悪の世界があって、そのことをすこく、居心地悪く感じている女の子がいるわけでしょ。そのへんなんかはほんとに自覚的にふつうに毎日生活してたら感じますよね、つてところをずばっと書かれてるので、どうですか。同世代の詩を書く人でない読者、たとえばさっきのマ

友とか、そんな方にも読んでもらったり。大飼 今回やっぱり小野賞をとったことで、まったく詩を読んだことがない、買ったことがないつていう方も読んでくれるようになりまして、それはほんとに嬉しいですよ。ね。それこそが一般の読者の獲得ですよ。高田 そうですよ。書いてる者同士だけでやり取りするよりね。たくさん反応もありましたか？

大飼 はい。高田さんもおっしゃってくださったように、共感っていうキーワードが

大いんです。特に出産のところはね。

高田 わかりやすいですもんね。たとえば「夜のガーデン」なんか、どう読むの？　つてやっぱりこれちょっとテクニクが要りまして。

大飼 難しい（笑）。

高田 詩を書く側の人間が読まないと、表面的に読まれてもちょっと難しいかもしれないけども、すごい奥行きのある世界やして、「ふつーのお母さん問題」、そういうふうにはつきり書いてくれていると、わかりやすいです。でもね、それをイデオロギー的に正面きつて書かれると詩としてはぜんぜん面白くないよね。そこを女性の選者、小池さんはきちんと見てくれてはるな、ともうんですよ。「女にしかわからない、女しかわからないその道があるのよ、男の人は王道を行つてるでしょ」みたいなジレンマ、それがやっぱりじわじわと出てるのね。「生姜」の詩をみんながすこくいい、いいつて言っています。

大飼 ねえ。意外でした。

高田 私もすこくよかったです。ほんとによかったですよ。

大飼 ほんとですか。すごいシンプルで。

高田 わかりやすいけども、奥があるよね。

大飼 レシピに載つてたんですよね。実際に生姜の佃煮をつくりながら、ずっと考えてるわけですね。

高田 時間経過があつて、子どもが起きないように。

大飼 今のうちしかできないけどつて考えるあいだにどんどんどん気持ちのほうがあふらんできてね。

高田 女性の書く詩で、わかりやすいけどもわかりやすさのなかにものすこく奥行きがあつて、これは生姜のつくりかたの詩ですつて書いてるところで泣けてくるというか（笑）。

大飼 ほんとですか（笑）。

高田 書くけどもほんととは違うでしょつて言いたいね。「昨夜 あの人を私を諫めたこと／空中にさまよつた私の悲しみ」つていうのをあいだに入れてるんですよ。刻みながら。シイタケよりも生姜よりも大事な一節という感じだね。「私はお母さんになりたかつた」だけでも今はそのジレンマということがずっと行間ににじみ出てるから、これつてふつうの人が読んでも、すこくわかるんじゃないかな。特に女の人には、お料理をしたことがあれば。

大飼 人間つてすこく欲深くつて、望んで

望んでやつと生まれてきたことにも対して「起きないでほしい」とかね、おもうんですよ（笑）。

高田 ぜったいおもうよね。

犬飼 だから、はあっておもって。

高田 そういう優しいところで、そういう自分を外から見てるっていう、なんか柔軟やねんな。そこがいいのかな。こうだああって決めてつけずにね。

犬飼 余韻を残すのが大事ですよ、作品って。どういふふうにとってもらえるか。

高田 一本調子で書いてたらあかんね。で、「ふつーのお母さん問題」のお母さんたちにも皆さんに読んでいただけて、共感もしてもらえて、ここのエッセイ「お母さん業の呪いときらめき」（雑誌「アフリカ」というのを読ませていただいて、ちょうどこれが去年（2018年）の八月ね。これが四月号ですね。もうじき私はその詩集を出すからってTwitter上で「あたしお母さんだから」（のぶみ作詞の「あたしおかあさんだから」）っていうの、炎上したんですってね。

犬飼 炎上しました。一瞬すごく。

高田 Twitterを私見ないんですよ。ただ友人がね、こんな人が「witherで炎上しますって、ぜんぶ教えてくれてたんです。

私は「ドードー」っていう同人誌の集まりに参加してるんですが、ほぼ男性ばかりなんですよ。年齢職業いろんな男性、その人たちと「あたしお母さんだから」を議論しました。男の人たちも様々な意見言ってます。でもやっぱりよくないなど。男でもよくないと怒ってたのね。それをここに犬飼さんがとりあげてあったから、「私がそういうふうにしたから」って。自分が孤独に私の内面の悩みだけを書いて、それで詩だっておもってるような層もたくさんあるかもしれないけども、犬飼さんの見ると、たとえばこの『なにがそんなに悲しいの』の表紙を飾るハートマークをみんなが読んで持ってくれたらいいのに、とか書いてありましたよね。いつもなにか、特に同世代の同性の仲間たちに私の気持ちを届けたい、そして一緒に共有してもらいたいっていうメッセージは、あとがきなんだけども絶えず持つてらっしゃいますよね。

犬飼 そうですね。いつも詩作するときも自分の内面を閉じこもって掘り下げるっていうよりは常に目線は他者に向いていて、その他者から得る情報とかイメージとかが作品にもなるし、この「stork mark」もそうですけど、共感していただけたっていう

のは、みんながおもってることがあるんですよ。だけどそれを別に言葉にするわけじゃなくて、みんななんとなく生きてるわけなんですけど、詩にしてみたらこういう感じでおもってるよっていうふうにも知ってもらいたいし、先ほども「生姜」の詩で涙が出るって言われたけど、そういう思いを彼女たちから引き出してあげたいんですよ。

高田 なるほど。そういう気持ちで、自分の気持ちをなんとか書きたい書きたいっていうような、私、私、私、っていう詩が多いってよく言われるんですけど、私から出て他者へつながるみたいな視点をずっと持つてはるんですよ。

犬飼 そうなんです。幼い頃はたぶん自分のために書いてたとおもうんですけど、だけど、なんかその時代は前詩集の『なにがそんなに悲しいの』の前ぐらいで終わっていて、他者のために書くっていうことが詩人の本質じゃないかなっていうふうにおもっています。

高田 仕事としての詩っていうものをやっぱりどこかで意識してるんやね。

犬飼 このときは賞とかもってないから仕事とは言えないですけど、物書きの姿勢

としてはやっぱり詩っていうものは文学とか芸術であるとおもうので、それは他者のなんらかの力になるべきかなってふうにまじめに(笑)。

高田 まじめでいいとおもう。どうもね、作品が楽しいのに本人はまじめだね、とか言っただけだね、作品もめっちゃまじめですよ。全力投球してるとおもうよ。

直球やおもうわ。そら楽しい言い回しがあるけども、それも含めてすごい直球。女性の直球が来てるなっておもいますけどね。爽やかな直球。女性性っていつたらものすごく幅広いでしょう。もっとセクシャルなこともあるし、陰湿な部分もあるし、情念の前面に出たような作品もあるやろけども、そういう意味では非常に健康な女性性というか。

犬飼 よく言われます、それ。

高田 へえ。そうなんやね、やっぱり健康なんや。

犬飼 そんなふうにおもわれるみたいですよ。高田 だから気持ちがいんじゃない。で、他者に向けておっしゃっている健康なところがないと、他者にも遠くまで届きにくいですよ。偏った他者、密室にいるような個人の他者にしか届かんような詩もある

りますよね。それでもいいっていう考え方もありますよね。百人おつても一人にだけ届いたらいいねん、っていうような考え方もあるけども、基本的にそういうふうに関感してもらいたい、その人たち、自分ではことばにできないいろんなわだかまりを持った女性たちに私のことばをあげたいっていう姿勢で書いているでしょう。それは立派。犬飼 (笑)。そんなことはないんですけど、やっぱり自分が文学で救われた部分ってありますよね。このことばはずっと心に残ってるのか、そういう体験があったからやっぱり自分も次は与える側にいられたらほんものの書き手(?)かな、っていうふうにおもいます。

●これからの展望

高田 今後の展望、学生時代に作らあった卒業制作の詩集を入れて四冊作りはった。

今後はどういう展望を持って書いていかれますか。

犬飼 今後は、これは言っっちゃいますけど、早いうちにもう一冊出します。

高田 (拍手) 時間をおかずにね。

犬飼 二年ぐらいで書けたらいいなって。

高田 あるテーマを定めて。それは今の延

長ですかね。

犬飼 今の延長はひとつありますね。やっぱり常に視線は他者に向けておきたいので、他者との関係性のなかで人々をちょっとでも救えるっていうたら大袈裟ですけど。

高田 支えになるような。

犬飼 なので、私の作品っていうのは、この「Stork mark」いちばん最後のコンセプトは最後までことがこぼを獲得していく明るい感じで終わってるんです。ずっと子育てしんどいしんどいだけじゃなくて、やっぱりこどもの無邪気さとか生命力つてものをに入れて、最後ちょっと希望があるような感じにしたかった。次の詩集どうなるかわかりませんが、最後はやっぱり希望のある世界にしたいですね。詩でそういうことを書いていけるなら。

高田 読み終わったら、あしたは明るいという感じですね。

犬飼 すこしね(笑)。

高田 無条件に能天気にも明るいなんてのはありえないけども、そういうことで「息子の発見」が最後に来てるわけですか。息子がことばを発見したことを発見した、ということですよ。

犬飼 そうなんです。

高田 こどもを生んだっていう話もあって、赤ちゃんのときもあって、こんなふうにとばを獲得していくときもあって、はいはいしてるこどもが出てきたりとか、いろいろだけれども、子育ての詩っていうふうに限定して書いてないんじゃないですか？

犬飼 そうなんです。書き下ろしの作品もあるし、いろんな作品を入れますね。

高田 育児とかに格闘している女性の詩集だというようなレットテル貼りは、その部門はあるけどね、それはちよつとしてほしくないなと私はすぐおもってるんですよ。それちゃうで！ 言いたいねんね。新聞記者の人でもそう書きやすいでしょ。

犬飼 そうですよ。子育て詩集とかって言われると。

高田 ちよつとちゃうやろ、それよう読んでつてすぐ感情豊か(?)になるんですけどね。

犬飼 そうですか、嬉しいですよ。

高田 子育ては、一部です。私の生活の。確実にそう読めますよね。そこをもっと、子育てをしなが仕事をして、自分はなにかと考えている女性の視点が入ってるのね、子育てとなんや出産だけのことをクローズアップするな！ って私はめつちや腹

が立ってんの、実は。

犬飼 ほんとうに嬉しいですよ。けつきよく一部なんですよね。出産って。

高田 出産したことがそんな女の勲章やみたいなことないしね。

犬飼 そうです。ぜんぜん違うですよ。

高田 だけど、特に男性とか、あるいは伝統的な価値観の女性なんかはそれだけで王道を歩くような、それを評価しとけばいいような感じでしょう。そうじゃないよっていうか。そういうふう読み取ってます。そう読んでほしいなって私はおもいました。

犬飼 女性つてべつに出産とか育児しても、べつの顔もありますよね。当然。だからそのこのほうの葛藤もあるし、自分とお母さんだけじゃないんだよつてことをその詩集には込めたつもりです。

高田 込められてるような感じで読んでます。けどね、やっぱり女の方が伝わりやすいかなとおもうしね。すごい葛藤ですよ。こどもは確かにかわいいしね、日々変化してくるから、喜びでもある。けどそれだけと違うっていうね、べつの世界に行きたいていうのがありますよね。そういうような胸のやもやが、十年か十一年のあいだにこどもが大きくなつてはるけども、

こどもについてのことだけを書いてるんじゃないっていうね、飛び飛びにこどもがちっちゃかったり大きかったり出産前だったりしながらこの作品に入ってますよね。

犬飼 そうなんです。だからあえて時系列ばらばらにして。さすが高田さん！ わかつてくださる！（笑）。

高田 いえいえ。それは編集者のことを「アフリカ」で「頼んでよかったわ」って言っただけど、押見（聡）さん、男性ですよ。だけどそういうのがすっぽり伝わって、受け止めてしてくれてはる。

犬飼 ほとんど並びとかの相談はあんまりしてないですけど、押見さんも実は詩人なのでね。

高田 ようわかつてはる。変な話やけど。

犬飼 そうです。ようわかつてはる（笑）。

高田 みなさんと共同してできた本というか。この詩集の表紙の絵もとくべつにね。

犬飼 すごい不思議な感じをしますよね。

高田 ちよつとこわい。

犬飼 そう、こわいんです。この（表紙の）人、笑ってるのか、なんか微妙な表情。

高田 この世の感じがしなくてね。

犬飼 このコウノトリなんですけど、これも死んでいるのか生きてるのかわからな

い。

高田 すごくこわいです(笑)。

犬飼 画家の新田美佳さんに作品を読んでいただいて、イメージされた絵なんです。

画家の方の感性で描いてもらったので。

高田 読んで、彼女が描いたんですね。

犬飼 画家さんもお母さんなので、小さな子どもさんがいるので、なにかおもうところがあってこのような絵になったのかな、とおもいます。たしかにこの世のものとはおもえないですね。

高田 かんたんなイメージで受け入れられないところがある。かわいい女性のはずなんですけどもちょっと現実味が無い。

犬飼 この作品、お気づきかわからないですけど、仕掛けがあつて、こうやつてやると(表紙カバーをはずすと)もう一篇出てくるんです。

高田 サプライズのような。これはどこにも。

犬飼 書いてないです。

高田 見つけたも得つていうのやね。私「アフリカ」を読むまでわからなかった。

犬飼 広げてみないとわからない。こういうのが編集の方のアイデアですね。

犬飼 なんにもない本が多いですけど、じ

つくり。ちよつとそこは仕掛けでした。

高田 いろんなところにそういう楽しみをこめて詩集をつくることにも、ひとつの仕事としての楽しみを見つけてるね。ただ詩がたまつたから出しますわ、じゃない感じやね。お借りして読ませていただいた前詩集の「なにがそんなに悲しいの」の表紙もね、はじめは桃思わなかつた(笑)。ハートを逆さまにするしシヨッキングピンクやし、もう私はこの詩集は無理やな、ついて行かれへんな、と表紙だけでね思いました。この桃、お尻っぽいですよ。読んでいたらいつぱい出てくるし、するとだんだんこの桃が好きになつてくる(笑)。

犬飼 かわいくおもえてくるんですよ、これ。

高田 ほんとにそう、受け取り方が変わるんですよ。こんな趣味ないはずやねんけど、これはいいわつていうのは、繰り返して読んだときに変わつて行きました。なんでこんなに少女趣味の装丁するんかい、とかつて突つ込みながら読んでいったら、いや、深いなとか(笑)。

犬飼 そうそう、こわい。

高田 なかなか深いし桃はいい。肉につつまれて、桃の作品が二つ出てきますよ。

あ、これはそうか、犬飼さんはやつぱり特別なおもしろい逆さハートなんやな、とおもつてね。よくわかりました。一個一個、そんなふうなこだわりとか仕掛けをこめて作つてるなあ。

犬飼 せっかく読んでいただけなら、本の装丁もおもしろいほうがいいですよ。

高田 そのからくりの向こうに作者が伝えたいものがあるというか。じゃあ、これからも短いスパンで、とりあえず次の詩集をつくつてもらつて、待っている読者に届けてもらつて、末永く「女の人」の詩を。当然ですけど自分が女なんだから。だけど「女」におもねるわけじゃなくつて、ひたむきに生きていたら、女の詩であつた、みたいだね、それを期待します。

犬飼 ありがとうございます。

(二〇一九年一月一七日、
大阪文学学校にて)